

無限再生

時に目を瞑り、そして、ぶち壊せ
有限を感じて周りが見えなくなったなら
両方の瞼を閉じろ
ご覧、眼前は無限だろう

現実逃避

理想主義

何とでも言うがいいさ

目に見えるものに囚われた輩を

せせら笑って目を瞑れ

大丈夫、体が覚えている

まだ、空が大きく高く

願えば何者にもなれ

望めば何だって出来た

幼い頃の記憶の断片

世界は無限で

自身は無敵だった

あの頃の記憶

大丈夫、体は覚えている

笑い方を、泣き方を、覚えている

怖くなったら目を瞑れ

そして、ぶち壊して、再生すればいい

夏、来たる。

西の都で祇園祭があった

祇園祭のあった前日、関東地方で梅雨が明けた

梅雨が明けた日の夕方、起きぬけに窓に目を遣ると

遠くの空が光っていた

よく目を凝らしてみると光っているのは雲だった

雲と雲の間を閃光が何回も走った

龍が光を放ちながら雲間を泳いでいるようだった

空気を揺らすような大きな雷鳴は一切聞こえなかった

雷神を見たのかもしれない

その日は風が凪いでいた

雷神を見た次の日に、蝉が鳴くのを聞いた

日曜日、夕方、

今日は風が吹いている

生ぬるい風が吹いている

今日の体温、37度4分

今日の最高気温35度

扇風機の音

氷水の入ったグラスの氷が溶けて奏でる音

空の青、雲の白

季節はすっかり夏であった

ワガママ女のジレンマ

誰からも特別好かれることはなく
誰からも特別嫌われることもない
私は独りだ

などと、容易に孤独を吐き出せるほど子供ではなく
そして、誰かの特別になれる可能性がある訳もなく
かと言って、本当に独りで生きられるほど強くない

答えなどない、という答えは当の昔に明らかである
なのに、なぜ抗いたいと思うのだろうか
という理由だって分かっている

でも、まだ、やはり、どうして、なぜ

逆説と副詞ばかりが続いていく

だから、頭がまとまらない

なのに、どうして

「 」

ニッチモ君とサッチモさん

道を歩いているとニッチモくんとサッチモさんに会うことがあります。

ニッチモくんとサッチモさんは道の前と後ろを通せんぼするので、二人に会うと身動きが取れなくなります。

そういう時は、ジタバタしてみると良いです。

道をあけてくれます。

でも結構な頻度でジタバタしても道をあけてくれない時があります。

そういうときは、更にジタバタしてみます。

そうすることで、道があくことも多いのですが、

すぐにニッチモくんとサッチモさんが道をまた通せんぼしてしまうので、

時間が過ぎるのを待つのが一番良いようです。

足が止まるので空を眺めたり咲いているお花を見たり出来ます。

靴紐が緩んでいるのを直したり出来ます。

休むことが出来ます。

そんなことをしながら時間をやり過ごして、

気が付くと、

大抵はニッチモくんとサッチモさんは消えていたり、道をあけてくれたりするのです。

そんな風に歩いています。

<にっちもさっちもいかないとき>

砂上の楼閣、その名は

差し伸べられた手は全て虚像で、砂の様に指の間から崩れ落ちる

その繰り返し

体の構造が受動的であるのに何故、能動的に自らの手で開拓していかねばならないのか

虚像を掴んでしまった罰なのだろうか

これでいい、これでいいと必死に言い聞かせて作り上げたものは砂上の楼閣だったと気付かされる

誤魔化しさえ許されないのか

ならば、前へ前へ前へ

しかし前に見えるものは蜃気楼であった

蜃気楼の中で再び砂の上に城を築く

己が気が付いてしまうまで、これでいいと言い聞かせながら築いていく

楼閣の名は、居場所、と云うらしい

泥に咲く花

「泥から咲く花は美しい」
とは、誰の言葉だったか。

泥から咲く花だけが美しいとは限らない

とか、
泥が汚いとは限らない

とか、
泥と花を比較するから花は美しく見えるのであって泥には泥の良さがある
とか、

屁理屈みたいな言葉遊び
遊びならまだしも言葉の揚げ足取り

溢れて出るのは
耳触りの良い言葉
奇をてらった様な言葉

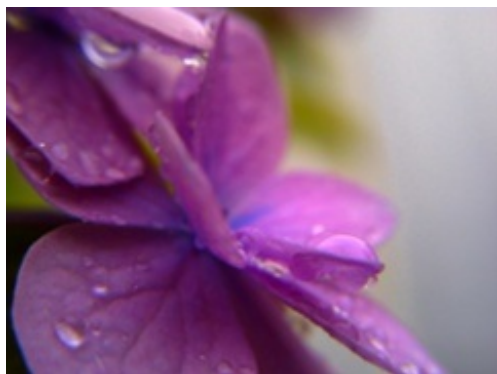
その舌の根も乾かぬうちに
泥が花になったり花が泥になったり
千変万化、雲集霧散
まるで雲を掴むような

すべて
「で？何？」
その一言で一蹴
蹴散らすほどの凜々しさ美しさ
そういうものが持つ、相反する強さと脆さそして儚さ

そういうものが
「泥の中に咲く花」

だと私は思うのです。

梅雨が連れて来た話



梅雨入りして久しいですが、皆様は如何お過ごしでしょうか。
長らく続く湿度で気分も滅入りがちになることと思います。
憂さ晴らし、とまではいかないでしょうが、わたくしの話に耳を傾けてみるのも一興かと。
どうぞ、お付き合いくださるとこれ幸いに御座います。

雨の日と云うと皆様も調子が悪いことが多いかと思いますが、わたくしの体調も例外なく芳しいことはなく頭痛や眩暈がして寝ていることが多いのです。

だからと言って、雨の日が嫌いというわけではありません。
雨の日は、様々な感覚や思いがまさに雨のように脳裏に降り注ぐので、思考のちょっとした粹狂な遊びが出来るのであります。

さて。その粹狂な遊びをひとつ。

雨の日は特に眩暈が酷く、寝ていることが多いのです。
目を瞑っている所為か、わたくしの五感は視覚以外の臭覚や聴覚に集中するようで、いつも目を使って見ている世界とは違う世界が頭の中に広がります。
濡れたアスファルトの上を走る車のタイヤの音、屋根に落ちる雨の音、水道の蛇口から漏れる水の音（あ、きちんと蛇口を閉めなくてはなりませんね）
五線譜に踊る音符を「おたまじゃくし」とは良く表現したもので、生き物のように雨音のリズムが脳裏で踊ります。
少し深呼吸をしてみましょう。
この時期だと土の湿った匂いを運んでくるような初夏の匂いが雨と共にわたくしの嗅覚を刺激します。
そうして雨の日の水たまりで遊んだ子供の頃の記憶や雨の日独特の湿ったノートで勉強した学生の頃の思い出や色々なものも運んでくるのです。

止まない雨はないということ、晴れがあれば雨があること、笑う日もあれば泣いてしまう日もあ

ること、

そんなことを体験できた過去を愛おしく思えるわたくし自身が今いること、
そしてそんな自分に気が付くこと

色々な雨音を聞きながら思考の旅に出ます。

そうしていつしか夢の中です。

目が覚めれば、雨があがり朝露に濡れた草木に出会えるのです。

一の事象から十の素敵と綺羅星のような感覚を見付け出せる、そんな現状を誰が嘆きましようか
。

雨に濡れることを怖がるようになったのはいつからか
雨ならば雨に濡れても良しとする恰好で雨を楽しめばいい
濡れたら乾かせばいい
汚れたら落とせばいい

まあまあ。

わたくしったらこんな人生の訓戒のようなことまで説いてしまう始末です。
お遊びが過ぎましたでしょうか。

雨は空からの贈り物

梅雨は夏への序曲

雨が降って気分が滅入りそうになりましたら目を瞑って耳を澄ましてみてください。
いつもとは違う世界が見えてくるかもしれません。

最後までお付き合い頂きありがとうございます。

またどこかで、わたくしのよもやま話に耳を傾けてくださると、これまた幸い至極に御座います
。

というと、喋り主は煙のように消えて、後には青空だけが残った。